

# 図書館報

令和8年2月 25 日発行  
愛媛県立丹原高等学校  
図書館委員会



「自分にとって  
本当の敵とは…」  
校長 合田 明典

実を言うと、私は読書家です。読書記録は、スマホのアプリで管理していて、バーコードで読み取って登録し、星1〜5の評価をしています。読書冊数をグラフでも表せるので確認すると、昨年が九

十四冊、今年が七十二冊でした。ちょっとペースが落ちています。何でだろうと振り返ってみると、丹原高校の歴史を未来に残すために手掛けている「百二十七年史」の編纂に多大な時間を要していること、ネットフリックスなどで映画やドラマを観ることが増えたことが原因だと気がきました。「百二十七年史」は、資料を読み込むうちに、当時の学校の雰囲気や青春時代を過ごした生徒たちの息吹を感じ、とても楽しい作業です。問題は、サブス

クでの視聴です。私は映画やドラマを否定しているのではなく、素晴らしい作品や考えさせられる内容のものも多くあります。けれども、そのことで読書量が減ると、少しむなしく物足りなさを感じます。それはなぜかというと、読書をすることで意識が内面に向かい、自分の深いところで物事を思索したり、自分と向き合ったりすることができなくなるからです。といっても、私が星5と評価するのは五冊に一冊ほど。読んでみたら期待と違っていたということも多々あります。皆さんも、面白そうと思って読んだ本が期待どおりではなかったとしても、がっかりせず読み続けていると、きっと

心に響く本に出会えますよ。  
では、私のおすすめの本を紹介します。それは、『同志少女よ、敵を撃て』です。逢坂冬馬氏のデビュー作で、直木賞候補となり、本屋大賞やアガサ・クリスティー賞を受賞した作品です。舞台は独ソ戦が激化する一九四二年のソ連。モスクワ近郊の村がドイツ軍に襲われ、少女セラフィマの母親など村人が殺されます。ソ連の女性兵士リーナに救われたセラフィマは、母を撃ったドイツの狙撃手と、母の遺体を焼いたイリーナに復讐するため、ソ連軍の狙撃兵となります。しかし、セラフィマは敵兵を狙撃し続ける戦いの中で、「本当の敵と

はだれか。」について葛藤します。自分にとって本当の敵とは…。  
戦争小説でありながら、「自分の在り方」を考えさせられる物語です。文章もストーリー性に富み、自ずと引き込まれます。ちなみに、旧ソ連にはリュドミラ・パヴリチェンコという、三百人以上を狙撃したとされる女性狙撃手が実在します。彼女も葛藤の中に生きただけでしょうか。なお、彼女は現在のウクライナ出身です。  
ロシアとウクライナとの戦争が続ぎ、正解が簡単に与えられない今の時代を生きる高校生に読んでほしい一冊です。

私の読書体験  
 新任の先生方より原稿を  
 寄せていただきました。

開高健

国語科 角田 修一

今の時代には全くそぐわないが、中学、高校を男子校で過ごした私にとって、「男(漢)」という自覚は、自らの基盤の奥深いところに常にあつた。そして、このいびつとも言える自意識の形成に大きく寄与したのが、「開高健」という作家の作品だった。従軍して目にしたベトナム戦争を描いた小説のある一方で、繊細に描かれる精神性の高い物語、酒・旅・魚釣りという大人の男三点セットのような紀行やエッセイ、CMのコピーに至るまで、その全てが一人のペ

ンから生み出されることに圧倒され、強く魅了された。特にエッセイは、作家本人の飄々とした風体と相まって、グラスを傾けながら語る「男」のダンディズムがプンプン香ってくる。ヨーロッパの片田舎の小川でマス釣りをする姿に思いを馳せたものだった。当時の私は、作品はもちろんだが、その人物や生き方に憧れ、釣り道具まで真似したものだ。当時の私は小説よりもエッセイをよく読んでいた。読みやすいということはもちろんあるが、虚構ではない作家のリアルな本音と息遣いが現れているエッセイが、私は好きだったのだ。

今の子どもたちにエッセイ(随筆)というジャンルは

あまり人気がないのかもしれないが、作品を生み出す根源としての作家に興味を抱く人は、是非気軽に読んでほしいと思う。もしかすると、生き方の師に出会えるかもしれない。

「歴史小説」を読もう

地歴・公民科 日和佐 敬三

山本周五郎(1903～1967)の

作品に『樞ノ木は残った』という小説があります。一六七一年の仙台藩のお家騒動(伊達騒動)を題材としたものです。その小説の主人公の原田甲斐は、史実としては伊達騒動における「悪人」として後世に伝えられています。しかし、『樞ノ木は残った』では、その評価を逆転

させて、原田甲斐を仙台藩を守った人物として描いています。

また、山本周五郎の別の作品に『栄花物語』という小説があります。一七六七年に側用人、一七七二年に側用人のまま老中を兼任して幕政を握り、田沼時代と呼ばれる時代を築いた田沼意次を題材とした小説です。現在では、その田沼政治に対し「積極的な商業資本の活用」というプラスの面も評価

されますが、この小説が書かれた頃(一九五三)は、「賄賂政治」のみが強調され、彼の政治は「悪政」として伝えられていました。しかし、山本周五郎は、その評価を逆転させて、田沼意次を清廉潔白の人物として描いています。

この二つの小説は、歴史

を後世の評価のみで見ることが一面的であることを、私たちに教えてくれます。歴史は、後世の人が主観的に記録したものです。例え同時代の歴史資料であっても、文字による記録などは記述者の主観が入ります。もちろん、紹介した二つの小説も作者の記述による一面的なものであり、しかも小説はあくまでフィクションです。しかし、歴史小説は、歴史をより身近なものとして感じさせてくれます。歴史小説はあくまでフィクションであり、一面的なものであることを踏まえたうえで、みなさんも歴史小説に親しんでほしいと思います。

<p>『砂の器』松本清張 数学科 米田 周平</p> <p>小学校三年生から高校卒業まで続けてきた「ピアノ」は、私にとって趣味とも癒やしとも云える大切なものである。学生の頃から読書には情熱を燃やして来なかつたが、この「砂の器」は、主人公が著名な音楽家でピアノを弾く描写が印象的で作品に引き込まれた。</p> <p>優れた才能を持つ音楽家 和賀英良は、自身の生まれや生い立ちを戦後の混乱に紛れ、偽造し現在の地位と名声を手に入れた。本当の和賀は、ハンセン病を患う父「本浦千代吉」と日本各地を放浪し、いわゆる浮浪者として生きてきた「本浦秀夫」である。その中で唯一父子に手を差し伸べ、千代</p>	<p>吉を療養所に収容させた三木謙一 巡査は、それから十二年後、和賀によって殺害される。</p> <p>三木 巡査は、ポスターを見て、あの時の秀夫が和賀だと知り、懐かしさのあまりコンタクトを取る。正真正銘そこには立派になった秀夫にひと目逢いたいという純粋な気持ちだけだっただろう。しかし、和賀にとつてみれば、過去を知る人物にゆすられるという恐怖で命の恩人を殺害してしまうのである。</p> <p>この物語は単なる殺人事件ではない。ハンセン病に対する当時の扱いや、当人たちの受けた悲しい現実が見える。テレビで映画化されたものも見たが、悲しい旋律のピアノの音色と雪山を歩く父子の姿が妙にマッチ</p>	<p>して、メロディが離れない作品である。</p> <p>『奪われし未来』 シア・コルボーン著 理科 玉井 洋介</p> <p>高校時代に読んで強く心に残っている本が、シア・コルボーン著『奪われし未来』です。本書は、環境中に存在する化学物質が生物の内分泌系に影響を与え、次世代にまで深刻な影響を及ぼす可能性があることを、数多くの事例と共に示しています。</p> <p>当時の私は、環境問題という公害や大気汚染といった目に見えるものを想像していましたが、この本を通して、目に見えない物質が</p>	<p>静かに、しかし確実に生態系や人間の未来を脅かしていることを知り、大きな衝撃を受けました。</p> <p>この読書体験をきっかけに、「なぜこのような影響が起るのか」「科学的にどこまで解明されているのか」を知りたいと思うようになり、大学では環境ホルモンに関する研究に関わることになりました。一冊の本との出会いが、自分の関心を学問へと導き、進路選択にも影響を与えたことを、今でも鮮明に覚えています。</p> <p>読書は、将来への扉を静かに開いてくれる力を持っていると感じています。</p>	<p>本と書店と図書館と 英語科 野口 敦子</p> <p>物心付いたころ、私は多くの本に囲まれていました。祖父が経営する書店の裏に住んでいて、近所には松山市立図書館（現・三津浜図書館）がありました。絵本も漫画も物語も読み放題でした。</p> <p>小学校に入ってから、松山市役所横にあった愛媛県立図書館へ行くようになり、堀之内への移転後も通っていました。小学校を卒業する頃には、児童図書室にあった推理小説をほぼ読破していました。高校三年の夏休みに友達とここで受験勉強をしたのは良い思い出です。</p> <p>大学生のときに海外秀作絵本を集め始め、子どもが</p>
--	--	---	---	--

<p>生まれてからは絵本の読み聞かせをするのが習慣でした。今、わが家には数百冊の絵本があります。</p> <p>図書館司書を目指したこともありました。通信制大学の講座を受講しましたが、途中で挫折してしまいました。しかし、教員として学校図書館の運営に携わることができました。大変な業務もありましたが、充実していました。</p> <p>振り返ってみると、私は本に囲まれて本当に幸せな時を過ごしてきました。今も、度々書店や図書館を訪れ、すぐ手に届くところに本があります。</p>	<p>私の読書体験</p> <p>農業科 真鍋 沙耶香</p> <p>小さい頃、読書はあまり得意ではありませんでした。教室で本の中の小さな文字を追いかけるより、運動場でボールや人と追いかける方が好きで、休み時間のチャイムとともに運動場へ走っていく毎日でした。そんな中、小学生の時に朝読書が始まり、「読まなくてはいけない」状況となりました。乗り気ではありませんでしたが、学級文庫の本を読んでみると意外に面白く、休み時間でも教室に残って続きを読むようになりしました。それから少しずつ読書の習慣が付き、図書室や本屋へ通うようになりました。</p> <p>今でも時間のある時には</p>	<p>本を読みますが、以前に読んだ本を読み返すこともあります。森絵都さんの『カルフル』、有川浩さんの『レインツリーの国』、門田隆将さんの『甲子園への遺言』など。ジャンルは様々ですが、本を読むと、自分にはなかった感覚、自分の知らない世界を知ることが出来ます。印象的な言葉に、癒されたり励まされたり、刺激やアイデアをもらうこともありです。今でも体を動かすことは好きですが、心と頭を動かす時間として、これからも様々な本を読み、自分の幅を広げていきたいと思っています。是非面白い本があれば教えてください。</p>	<p>おすすめの3冊</p> <p>農業科 樽島 博幸</p> <p>〈一冊目〉</p> <p>『銀座「四宝堂」文房具店』</p> <p>著者：上田 健次</p> <p>出版社：小学館文庫</p> <p>銀座のとある路地の先、円筒形のポストのすぐそばに佇む文房具店「四宝堂」。ここで巻き起こる様々な客からの悩みを、主人公の店主・宝田硯の言葉と思い出しの文房具でじんわりと解きほぐされていく、心温まる物語。一卷に五題の短編集で構成されていて、そこに登場する文房具が魅力的に描かれている。読み終わると、それがどのような文房具なのか知りたくなり、つい欲しくなる。</p> <p>現在、I～VIまで出版されている。文房具が好きな方は是非一読あれ。</p>	<p>〈二冊目〉</p> <p>『満月珈琲店の星詠み』</p> <p>著者：望月麻衣</p> <p>画 桜田千尋</p> <p>出版社：文藝春秋</p> <p>「満月珈琲店」には決まった場所がなく、気まぐれに現れるトレーラーカフェ。満月の夜だけに開店する不思議な珈琲店。そこでは猫のマスターと店員たちが、極上のスイーツと香り高い珈琲、そして運命を占う「星詠み」で、日常に疲れた人たちを優しくもてなすというストーリー。</p> <p>現在、第一～七巻まで出版されている。もうひとつの魅力はイラストにある。どれも食べてみたくなるスイーツやドリンク。お楽しみあれ。</p>
--	---	--	---	---

<p>『三冊目』 『神様の定食屋』 著者：中村颯希 出版社：双葉社</p> <p>定食屋「てしをや」は、地元の人情派食堂を地で行くような繁盛店。この店主である高坂夫婦が、旅行先で永遠の眠りにつく羽目となった。主人公は、兄哲史と五歳年下の妹志穂。「てしをや」を継ぐことに。ところが料理ができない兄哲史は、ふと立ち寄った神社で神頼み、本当に神様が現れて死者の魂を憑依させられてしまう。</p> <p>現在、第一〜五巻まで出版されている。死者に操られて料理を再現し、言い残した想いを伝えるという心あたたまる物語。一涙あれ。</p>	<p>『図書館戦争』シリーズ 事務課 安波 詩織</p> <p>私は恥ずかしながら普段ほとんど本を読まないのですが、有川浩さんの『図書館戦争』シリーズは「読みたい！」と思って自分で買に行った思い出のある本です。読みたいと思ったきっかけは、この本を原作にした映画を見たことでした。メディアを良化法という法律によってあらゆるメディアの表現が規制される世界で、表現の自由を守るために戦う「図書館隊」に入隊した女の子が主人公のお話なのですが、私は戦うシーンではなく、かつて自分の大切にしてきた本を守ってくれた憧れの図書館員との恋愛模様が大好きでお気に入りの映画になりました。映画の続きはどうなっ</p>	<p>たんだらうと気になっていたところ、小説で描かれていると知り、「今すぐ読みたい！」と買いに行つて夢中になつて読みました。読みたいと感じる本に出会うと、驚くほど集中して読むことができ、物語の世界に入り込むことができると感じました。今はアニメ『薬屋のひとりごと』の続きが気になって本を読もうと思つてい</p>	<p>『あやうく一生懸命生きるところだった』 教育業務支援員 藤原 雅代</p> <p>これまで積極的に本を読む方ではなかった私がこの本と出会つたきっかけは、娘が家に置いていったものを何気なく手に取つたことだった。印象的なタイトルに惹かれ読み始めた。特に心に残つたのは「理想通りじゃない『現状』を愛する」という考え方である。私自身、学生時代は周りに遅れないよう、無理に力を入れて生きていたように思う。大人になつた今振り返ると、あの頃は「一生懸命でなければ価値がない」と思い込んでいたのかもしれない。</p>	<p>きることを教えてくれる一冊である。これまでの歩みを否定するのではなく、そのまま受け入れることの大切さを、静かで温かな言葉で伝えてくれる。不完全な自分を認め、ネガティブな感情も否定せず感じ切る。頑張りすぎている人にこそ心の緩め方を知り、自分を大切にしてほしいと思う。私自身、年齢を重ねた今だからこそ、この本のメッセージが自然と心に響いた。</p>
	<p>たんだらうと気になっていたところ、小説で描かれていると知り、「今すぐ読みたい！」と買いに行つて夢中になつて読みました。読みたいと感じる本に出会うと、驚くほど集中して読むことができ、物語の世界に入り込むことができると感じました。今はアニメ『薬屋のひとりごと』の続きが気になって本を読もうと思つてい</p>	<p>『あやうく一生懸命生きるところだった』 教育業務支援員 藤原 雅代</p> <p>これまで積極的に本を読む方ではなかった私がこの本と出会つたきっかけは、娘が家に置いていったものを何気なく手に取つたことだった。印象的なタイトルに惹かれ読み始めた。特に心に残つたのは「理想通りじゃない『現状』を愛する」という考え方である。私自身、学生時代は周りに遅れないよう、無理に力を入れて生きていたように思う。大人になつた今振り返ると、あの頃は「一生懸命でなければ価値がない」と思い込んでいたのかもしれない。</p>	<p>きることを教えてくれる一冊である。これまでの歩みを否定するのではなく、そのまま受け入れることの大切さを、静かで温かな言葉で伝えてくれる。不完全な自分を認め、ネガティブな感情も否定せず感じ切る。頑張りすぎている人にこそ心の緩め方を知り、自分を大切にしてほしいと思う。私自身、年齢を重ねた今だからこそ、この本のメッセージが自然と心に響いた。</p>	

私の好きな本  
教育業務支援員 瀬尾 七重

少女時代は読書が好きで、よく読んでいたのは母が揃えてくれた福音館書店や岩波書店の児童文学図書。リンドグリーンや、当時NHKで放送されていた『大草原の小さな家』シリーズ、『ナルニア国物語』、ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』、『モモ』は特にお気に入りで何度も読み返していたのを覚えています。『ピーターラビット』の絵本も大好きで、大人になった今、多感な時期にたくさんさんの名作に出会えて良かったとしみじみ母に感謝しています。

必ず購読しているのが文筆家の清野恵里子さんの着物本。独自の審美眼で取り合わせた着物と、どこか懐かしさを感じるようなエッセイとが一つの物語を生み出して、まるで映画のワンシーンを切り取ったかのような情景が。活字だらけの本が苦手な方や、和のお稽古事や工芸的なものが好きな方にもおすすめです。

清野さんの『樋口可南子のきものまわり』折にふれて『マイ・フェイヴァリット（ファッションデザイナー稲葉賀恵の着物本）』は図書館でも借りられるので、興味のある方は是非！日本の文化は美しいなあと改めて思わせてくれる良本です。

「なぜ？」を重ねて、思考を整える  
ICT教育支援員 山本 美明

会社員だった頃、私は設備の不具合やヒューマンエラーの原因を見つげるために、「なぜ？」を繰り返して深く考える「なぜなぜ分析」という方法を使っていました。ただ、この分析はトラブルが起きた後に行うため、気持ちが落ちた状態から始めることが多いと憂鬱でした。それでも次のような良い点があることに気付きました。

「なぜ？」を繰り返すことで、普段は気付かない原因が見えてくる。」

「理詰めで考えるため、自分の考えが実際の状況と合っていないときに気付ける。」

このようなメリットがあるので、本来の目的である不具合の改善以外の日常生活でも、考えがまとまらないときや、将来の目標を考えるときに、要因漏れを防ぐためのツールとして使っています。

問題定義方法や陥りやすい注意点を学ぶには、『クイズで学ぶなぜなぜ分析 超入門』（電子書籍）がおすすめです。

また、仕事をするようになったら、『トヨタ式 5W1H思考』も、様々な視点から解決策を考える例が載っていて参考になります。



第71回青少年読書感想文  
全国コンクール愛媛県審査会  
課題図書部門 佳作

「私にとっての『ほんとうの幸い』」  
二年 三浦 健臣

読書感想文  
校内優秀作品

「悩みの正体」  
一年 杉野 優

「救いのない世界で」  
一年 北條 空良

「困難の中の希望」  
二年 玉井きつき

「私と学校、そして社会のルールこれから」  
二年 玉井 咲采

愛顔感動ものがたり  
エピソード部門  
高校生以下の部 入選

愛の手 西森 倅哉

まだ外はうす暗いのに、台所から米を研ぐ音が聞こえてくる。僕の好きな音。目覚ましより優しくて不思議と起きなきゃって思わせてくれる。味噌汁の匂いがしてきて、一日の始まりを感じる。起きる前から、母はいつも何かをしている。弟の制服も父のシャツも相変わらずシワひとつない。僕の弁当もおいしそうだ。卵焼きとか野菜とか、なんで毎日違うのか、母はすすぎる。でも母は、当たり前のような顔をしている。これがまたすごい。母の手、細くて白くて、昔はキレイだなーって想っていた。

でも最近、そこにある小さい火傷のあととか、傷とか、荒れた指先とかに気付いた。こんな手で僕たちの毎日を作ってくれていたことに、ぐっときた。ある晩、寝つけなくて水を飲もうと台所に行ったら、母がまだ起きていた。電気の下でちよつと丸くなつて、何か書いていた。たぶん弟の学校関係の書類とか、だろう。顔を見たら、クマもできていて疲れているの分かる。なのに不思議と横顔がすごく落ち着いていて、なんか泣きそうになった。「もう寝たほうがいいんじゃない？」という僕。でも母は、微笑みながら言う。「あと少しだけ。明日の準備が終わったら寝るから。」と。母は、僕たちの「明日」を、前日から作ってくれている。誰にも言わないで。当たり前顔して。

制服。味噌汁の匂い。毎日のお弁当。父のシャツ。ぜんぶ、あの手から始まっている。あれはもう祈りそのものだ。誰にも聞こえないけど、僕たちの無事や元気を願っている手。声に出さない優しいさつて、こんなにもすごいのかつて思った。それまで気づかなかつた「当たり前顔の愛」。胸いっぱい広がり、僕の中で何かが大きく変わっていく。恥ずかしくて素直に言えなかつたけど、今ならはっきり言える。この手のぬくもり、一生忘れられない。僕はきつと、ほんの少しだけ、大人になれた。だから、このぬくもりを、いつか誰かに返せたらいいなと心から思う。

丹高祭「ほんのひととき」

今年の丹高祭で、図書委員会が「ほんのひととき」を企画しました。「本に親しめる・ゆつたり過ごせる空間」をつくり、本が好きな人も、ちよつと休憩したい人も、ふらつと立ち寄れるような、気軽に楽しい場を目指し、四つのコーナーを運営しました。

〈移動図書館〉

図書委員おすすめ本を手書きのポップとともに紹介し、丹高生であれば誰でも借りられるようにしました。貸出はありませんでしたが、立ち寄ってくださった方に展示として楽しんでいただくことができました。

〈しおり作り体験〉

三年生の課題研究「竹うちわ」班から、丹原七夕夜市で使用した和紙を譲って

もらい、その和紙をマールブリングで染めたものを使用しました。お客さんには好みの柄の和紙を選んでもらい、世界に一つだけのしおりを作ってもらいました。最初は、お客さんも作り方を説明する図書委員も緊張して表情が固かつたのですが、作業を進めるうちに会話が生まれ、次第に笑顔が増えていきました。

〈古本交換会〉

事前に生徒や先生方に家で眠っている本を寄付してもらい、当日は気になる本があれば自分が持ってきた本と交換できるようにしました。誰かにとっては不要な本が、他の誰かの手に渡って新しい物語を生み出す場となりました。自分では選ばないような一冊との偶然の出会いが生まれました。

〈絵本の読み聞かせ〉

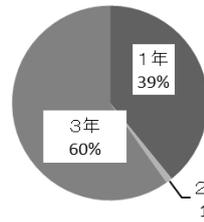
指定した時間に担当の図書委員が、小学生や小さな子どもたちに読み聞かせを行いました。始まる前は「来てくれるだろうか」と不安もありましたが、いざ読み始めると、子どもたちが絵に合わせて目を輝かせてくれ、安心して活動に取り組むことができました。

今回は全てが初めての挑戦だったため、準備に手間取ることもありましたが、来てくださったお客さんに楽しんでいただくことができ、無事に企画を成功させることができました。来年は学年が一つ減り人数も少なくなります。今年の実験を生かし、より良い企画を考えて実施していきたいです。

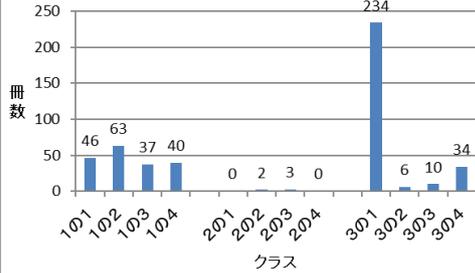
図書館利用状況

二〇二六年一月末現在

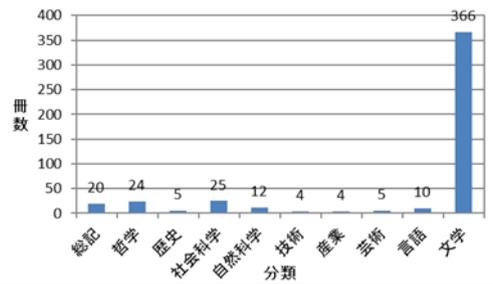
学年別貸出総数  
貸出総数 475冊



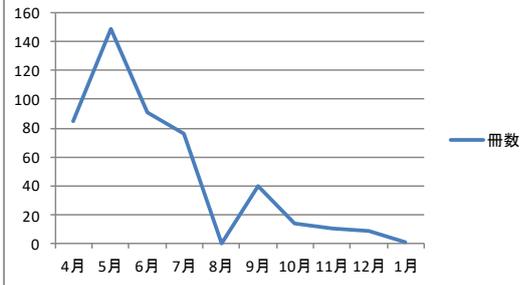
クラス別貸出冊数



分類別貸出冊数



月別貸出冊数



《多読賞》

- 三年 安藤 芹菜(142冊)
- 三年 山地 俊輔(110冊)

図書館報発刊に寄せて

今年度も、図書館報を発刊することができました。原稿の作成に御協力いただいた先生方、ありがとうございます。先生方にすすめられた本は図書館に置いてあるものもあります。読んでみてください。

図書館利用状況を調べてみたところ、貸出冊数は三年生が最も多かったです。二月になり、三年生の先輩方が来られなくなると、図書館の雰囲気寂しくなってしまう。

一年生や二年生にも図書館を訪れてほしいと思い、友達に丹原高校の図書館についてどう思うか聞いてみたところ、「本を借りる作業が面倒だ、本を読むのが苦手だから行かない」という意見が出ました。しかし、実際は

本の貸出も返却もスムーズにできます。もし分からないことがあれば、当番の図書委員に気軽に聞いてください。親切に対応いたします。

本校図書館には『ちはやふる』『ブルーピリオド』などのコミックや、シリーズ物の文庫、心理テストなど、幅広いジャンルの本が多数揃えられています。また、『あさきゆめみし』『史記』『三国志』などの歴史や古典のためになるコミックもあります。図書委員オススメの本を展示しているコーナーもあるので、きっと興味を持てる本に出会えますよ。

本を借りなくても、本を読むに図書館を訪れるのもかまいません。昼休みでも、放課後でも、空いている時間には是非、図書館に足を運んでみてください。

